

## 1 MAPを生かした指導の工夫

国語の授業に限らず、高等学校の授業形式は、どうしても講義形式になりがちであり、生徒は一方的に「聞く」という姿勢が身に付いてしまっているケースが多い。この姿勢からは、「教わる」という受動的な姿勢から脱却することはできず、自ら「学ぶ」という能動的な姿勢を生み出すことは難しいと考える。そこで、授業に対する自分自身の姿勢を、少しでも「学ぶ」という能動的な姿勢へと転換するために、必要な環境について考えるきっかけとして、この授業を計画した。MAPの手法としては、他人と違った観点から自分の意見を言うことは一つのチャレンジであるということや、エラーは悪いことではないということを経験的に感じてもらえるように工夫した。

2 教科・単元名 国語 詩

3 指導対象学年 1 学年

4 単元の目標

(1) 教材について

文章の読み取りから、得られる発見、気づきを体験し、その過程から授業への取り組み方、授業に必要な環境などを考えるきっかけとする。さらに、これから一年間の授業での「学び」を促進するために自分自身がどのように授業にかかわり、他者とどのようにかかわることが良いのかを体験的に学ぶ。

本時では、谷川俊太郎による「ことばあそび」の中の一編、「うとてとこ」という作品を用いて、読み取りのルールや、そこから生まれる自由な発想を体験的に学ぶ。この作品は主に小学校の低学年を対象にした教材として用いられるもので、高校生などにとっては非常に易しいものである。それゆえに、まだお互いに発言することに抵抗がある環境の中で、小グループのコミュニケーションを活性化させるという目的からも、適切な教材であると考えられる。

(2) MAP導入のねらい

一年間の授業における約束づくりを目的として、この時間を設定している。実際に高校生になると、ほとんどのクラスで積極的な発言がみられず、授業中は黙って聞くという一方的な講義形式に陥りがちである。その上、発言を求められても周囲の者と相談しあったりすることもなく、指名された生徒が返答に困っていても周囲の働き掛けが全くないという状態をよく目にする。「学び」を促進するための環境として必要なことは何か、また自分自身の授業に対するかかわりと他者に対するかかわりについて考えるきっかけとし、今後の授業に適用していくことをねらいとしている。

5 指導に当たって

年度始めの授業で、アイスブレーキングとしてこの授業を位置付け、さらに、授業の環境と個人の授業に対する取り組みの気づきを促すものとしてこの授業を位置付ける。ただし、若干のコミュニケーションを必要とするので、クラスの様子により何時間目の授業が妥当であるかは授業担当者によって判断される。

6 単元の指導計画（2時間）

小単元	時数	学習内容
導入 (本時)	2	オリエンテーション（ガイダンスと意識調査）
		授業での約束づくり

## 7 本時の指導

### (1) 本時のねらい

国語における読み取りの基準を体験的に学ぶ。同時に授業の環境づくりと、今後の授業に対するそれぞれ個人の取組の基準をつくる。

### (2) 指導に当たって

この授業では、難解な文章の読み取りが目的ではないため、読み取りに対する評価は行わず、今後の授業に生かすための授業と位置付ける。

### (3) 授業の展開

	学習内容	生徒の活動
導入  (10分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>挨拶と出欠確認</li> <li>国語に対する意識調査</li> <li>今日の授業の内容説明と個人の目標設定</li> <li>グループ分け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>元気良く挨拶をする。</li> <li>中学校までの国語の授業に対する自分のイメージを確認する。</li> <li>本時の学習内容と授業に対する目標設定をする。</li> <li>グループに分かれる。</li> </ul>
展開  (25分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時で扱う詩の読み取り</li> <li>グループ・個人の課題解決</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>(体験) ↓ (振り返り) ↓ (一般化) ↓ (体験) ↓ (振り返り)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>詩の第一連を読み、第二連と第三連を予測する。</li> <li>第二連までで気が付いたこと、気になった表現などを挙げてもらう。(表現上の特徴やリズム、構成など)</li> <li>第三連目の一行目から三行目までを作り、最後の行を全員で予測し、個々人が発表する。</li> <li>全員から発表されたものを見て、もう一度何が入るか、グループごとに話し合い、なぜそれが適当だと考えたのか理由を述べる。</li> </ul>
まとめ  (15分)	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業の振り返り</li> <li>今後の授業に生かしたいこと</li> <li>挨拶</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今日の授業でよかったことや自分自身の取り組み方と周囲の人とのかかわりについてまとめる。</li> <li>今日の授業から次の授業に生かしたいことをまとめる。</li> </ul>

(4) 評価

- ・ 意欲的に興味をもって取り組むことができたか。
- ・ 他者とのかかわりの中で積極的なコミュニケーションがとれたか。
- ・ 自分自身の意見や考えをまとめ、自分なりの答えを導き出すことができたか。
- ・ 今後の授業に生かせる自分の行動基準を認識できたか。

※ この授業そのものは、あまり評価の対象にせず、授業に対する個人やクラスの取組についての評価の基準をつくるための授業としてとらえたい。

教師の働き掛け(MAPを導入したねらい)	MAPの考え方を生かしたアプローチ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単に出欠をとるだけではなく、見えたことや感じたことなど、クラス全体や個人にちょっとした声掛けをする。</li> <li>・ クラスとして、個人として授業に対しどのようなかかわりをもつことを目標とするのかを明確にする。</li> <li>・ クラスの状態をリサーチする。 (グループ形成の過程、コミュニケーションの様子など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目標設定(本時で行う内容と目標の提案)</li> <li>・ 教師側が生徒の状況を把握するとともに教師自身や生徒も自分自身の状態について認識する。(GRABBSSの視点)</li> <li>・ グループの発達段階としては初期の段階であることを認識し、教師の都合で無理に均等なグループをつくらうとしないことを心掛け、グルーピングできないときだけ支援する。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人で考え込む必要はなく、答えが出てくる過程まではみんなで考えてよいなどの授業での環境について考えるきっかけを与える。</li> <li>・ 詩の特徴や規則性について読み取り、そこで得た気付きから自分の考えを導き出すように支援する。</li> <li>・ なぜそのような答えを導き出したのかその過程を尋ねる。</li> <li>・ それぞれの視点や考え方を生かし、自由に解答を出すように働き掛ける。</li> <li>・ 最後まで答えは伝えず、答えを待つのではなく自ら調べるという学ぶ姿勢への転換を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 課題を積極的に解決しようとする姿勢が見受けられるか、グループ内のかかわり、グループ間のかかわりは、きちんととれているかなど、答えを導き出す過程で起きていることに注意する。</li> <li>・ 一人一人に一度は答えを導き出すチャレンジを促す。今準備ができていない生徒は後で再チャレンジの機会を設ける。</li> <li>・ 自分の順番が回ってきたときに感じられる感情などにもスポットを当てる。</li> <li>・ 一人一人の考え方や感じ方が違うということを大事にする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今までの授業に対する取り組み方と、今後の授業における環境について考えてみる。</li> <li>・ 今日の授業の中でよかったと思うこと、続けていこうと思うことを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業において、ここまではぜひやろう、という基準を確認する。</li> <li>・ 必ずしも正解を答える必要はなく、自分なりの意見をもつことが大事であることや、エラーが問題ではなく、その前のチャレンジが大切であることを伝える。</li> <li>・ 一人で考え込む必要はなく、他人の力を借りればよいし、時には逆に貸してあげる必要があることなど、他者との関係の中から学びが得られることを確認する。</li> </ul>

## 8 MAPを生かした効果、まとめ、考察等

実際に展開した授業の中では、生徒たちからこんな質問が飛び出した。「他の人と相談してもいいの?」「正解はもうすでに出てしまった?」他にもたくさんの質問が飛び出したのだが、これらの質問は一体何を物語っているのでしょうか。

「間違えることは悪いこと」、言い換えると「正解を答えなければならない」という意識が、幾度も試験を受けてきた生徒たちにインプットされてはいないだろうか。間違いの中から学ぶことはたくさんあるはずであるが、それより以前に間違えることに対して大きな抵抗を感じている生徒が多いように思う。正解を答えることよりも自分自身の考えや意見を述べるのが大切なことで、そこからまた次のステップへと踏み出せるという気付きが得られればよいと考えている。

そのためにはMAPの考え方の基盤となっているフルバリューコントラクトとチャレンジバイチョイス、目標設定が必要となる。他者と違った考えや意見を尊重できること、間違った答えが出てきてもそれをディスカウントしない雰囲気、答えやすい周囲の働き掛けや援助などがフルバリューコントラクトに当たるだろう。また、自分自身の行動と感情から気付きを得るためにも、どのように自分自身が授業にかかわっていくかという目標が必要となる。その上で実際はどこができたところで、どこができなかったところなのかという気付きが得られるはずである。その一方で、こちらから常に指名して答えさせるのではなく、生徒自身が主体的に参加をしていける環境づくりなども心掛けていく。さらに、教科上での知識を身に付けるという大前提はあるにしろ、そのみにスポットを当てるのではなく、授業中に自分自身は、あるいは他者とともになんかかわりをもてたのかという点にも振り返る機会をもちたいと考えている。そして、時間こそかかるかもしれないが最も大切なことは、このいずれもこちらから押し付けるのではなく、自らの気付きで構築していくべきだということである。振り返りでは、「今日の授業で学んだこと」、「これからの授業で大切にしたいこと、実践していきたいこと」の二点に焦点を当てた。

題名と一連目だけを板書し、「ちょっと声に出して読んでみて」と投げ掛けるだけでこの授業は生徒たちが進めてくれる。「『う』って鳥の『鶉』のことだよ!だから四羽だ。」「読みにくいな~,全部ひらがなだよ。」など。そこで「じゃあ二連目はどうなると思う?」という質問をする。「うとうとうとう・・・」「違うよ、『てとてとてとて』だ。題が『うとてとこ』だから。」「『て』って『手』のこと?」生徒たちが自分自身で考え授業を進めていく様子は観ていて楽しい。最後の一行も正解を教えるという声は必ず上がるが、「知りたい」という動機付けができたことでこの授業は成功である。その内の何名かは必ず自分で調べてまで作者の書いた一文を見付け出すからだ。しかも、この授業を私が好んでやる理由がもう一つある。作者には申し訳ないが、生徒たちは自分たちが苦勞して導き出した答えと比べ、「私の(答えの)方がいい!」と口にする。正解が何であるかということよりも、自分自身が出した答えに満足するのだ。

クラス内では次第に、わからないから教えて欲しい、一緒に考えて欲しいという声が出始め、今日は教科書を読んでみようかな、などという声も聞くことができるようになってきた。今はこの声をまず大事にしたいと思っている。自分も含め、簡単に人は変わっていけないのかもしれないが、長期的な視点で徐々に、自分自身が望む変化をそれぞれが達成していくことを目標として授業を進めたいと考えている。

X	(参考)
X	うとてとこ
	うとうとうとう
	うがよんわ
	うとうとうとう
	いねむりだ
	てとてとてとて
	てがよんほん
	てとてとてとてと
	らっばふく
	ことことことこと
	こがよんにん
	ことことことこと
X	
X	※授業の時は
X	言葉を考える。